



本殿

歴史ある街・大川を

全国へ発信したい

風浪宮

宮司 阿曇史久さん

あずみ

今回は特別編として、風浪宮の宮司である阿曇さんに風浪宮について様々なお話を伺いました。

「おふろうさん」と大川

風浪宮は大川市酒見にあり、「おふろうさん」の名で親しまれているお社です。中世では「風浪大権現」、明治からは「風浪大権現」、明治から戦前までは「風浪神社」と呼ばれていたこともあったそうです。この風浪神社は柳川市内にもあり、以前柳川藩が治めていた時代の御分霊が祀られているとのことでした。また阿曇さんは、風浪宮は柳川藩だけではなく、佐賀藩にも縁があることをお話されました。

「参道を下った左手には、酒見城がありました。酒見城は筑後川を制する城で、以前は権力の境目にもなった場所

でした。酒見城を治めているか否かで力関係もぐっと変わってきましたね。江戸期は久留米藩でしたが、一時期は柳川藩や佐賀藩だったこともあります。その間、江上・八院合戦など様々な戦乱がありました。風浪宮の本殿だけは焼き討ちから免れ、国の重要文化財になりました。現在の本殿は永禄三年の建物です。回廊や楼門などは消失してしまいましたが、どの武将も本殿には手を付けなかったようです。

明治時代に旧国宝指定を受けており、これは太宰府天満宮などと同時期だったとのこと。福岡県内では宮崎宮の次に古い建物で、阿曇さんは「地域の皆様に守って頂いて今日がある」ともお話されました。ではなぜ風浪宮がいまの場所に建てられたのか。その歴



史は弥生時代まで遡るとのことでした。

「いまから一八〇〇年ほど前、この辺りは酒見貝塚と呼ばれる筑後地区では大きな貝塚でした。発掘調査が行われた際、この辺りからは弥生時代の女性の骨や土器などが発掘されています。またこの時代には珍しい鶏の骨も発掘されました。長崎の壱岐対馬にある原の辻遺跡、カラカミ遺跡、愛知県の朝日遺跡に続いて日本で四例目の出土でした」

こういった発掘が海洋族のお社があったことを証明するひとつとお話されました。

「家畜として鶏を飼う文化は、おそらく中国の江南地方から渡ってきたものです。河口がすぐ側で海に近い。また田手川を遡れば吉野ヶ里遺跡もすぐそこにあります。弥生の中

期、後期が一番栄えていたと言われていますが、海洋族の阿曇族もこの辺りにいて、風浪宮が当時の港町であったと言われています。阿蘇山の火山灰などの堆積で自然に、また干拓事業で競い合いながら陸地化が進んでいって、海岸線は随分遠くになりましたが、以前は参道を下ったすぐそばが筑後川の本流でした。向島という地名も本流の向かい側に島があったからといわれています。ここには生活の営みがあり、阿曇族が海の向こう

にある大陸・地域との交流を行っていたと言われています。阿曇族は船の操縦や造船の技術に長けていたと考えられるとお話されました。

「ここは造船するのに最適な土地柄でした。同じような土地柄に中国では連雲港があります。潮の干満差が大きく、それを利用した自然のドックがありましたから。日本だと有明海ですね。最河口付近にあたるここには港の機能があったと考えられます。またこのあたりで海の船から川船に乗り換えて、吉野ヶ里まで行ったとも考えられます。海の船のままでは川まで遡上できま

せんので、乗り換え地点が必要でした。壱岐にもそういった遺跡が残っています。阿曇さんは「大川は歴史性があるところ」ともお話されました。

「榎津・庄分あたりには船倉という地名があるように、あの辺りには船をおさめる蔵がたくさんあり、船大工もたくさんいました。昔は船に船箭を積んでいましたから、そこから現在の船箭の技術へと繋がっていったのではないかと考えています。これは大川のすぐいところのひとつだと思っ

ています。また風浪宮に縁の深い人物としてあげられるなかに阿曇磯良(阿曇磯良丸)がいます。阿曇磯良は初代神主であり、磯良丸塚(支石墓)が風浪宮の敷地内にあります。この支石墓を確認した九州大学の名誉教授である西谷正氏からは「日本で一番大きな支石墓」と大鼓判を頂いたそうです。「支石墓というのは、古墳などが出来る前の当時のお墓です。この王族の支石墓は川や海の近くに位置していますが、二千年近く水没したこともなければ流されたこともなかったのは奇跡的なことです。聖域空間として護られやすい場所だったため、ここにお社は建てられたのだと思います」

古から繋がる

昔から海と深い縁があった風浪宮。以前は漁業を営んでいる方や大阪の廻船問屋の方など、広くからお参りに来られていたとのこと。

旧暦の四月一日にあたる大潮の日には、沖詣り海神祭という神事が行われており、海上安全・海産豊漁大祈願をされているとのことでした。阿曇さん自身が小学生だった頃は学校を休んで神事へ行っていたとのことでした。

また数年前に西南学院大学の教授がこの神事へ参加された際に「これは神様をお迎えに行く神事です」と阿曇さんにお話されたとのこと。「行くことよりも戻ってくる

ことに重きを置いている神事であり、有明海の大潮の満ち引きの力を宿した大御幣という依代を本殿に返しています。皆さん実は大御幣に向かつてお参りされていますが、日本に数ある神社のなかで他にこのような信仰を宿した神社はないですね」

また干珠満珠伝説の舞台も有明海であるとのこと。

「文科省のプロジェクトチームが沖詣りに来られた時に、海の底が見えるような場所は有明海であり、伝説ができたところだろうと。こしか生まれることが出来ないものだとお話ししました」

山には山の神様が、海には海の神様が居られることなどアニミズム(精霊信仰)がわかるのが風浪宮だともお話しされました。

「神功皇后の伝承は福岡県内に数多くありますが、神功皇后がお命じになって創られたお社は風浪宮だけです」

歴史が詰まった街

現在、大川歴史講座も開催されているとのことですが、将来的には福岡市などで開催されている研究者によるシンポジウムなどを大川でも開催したいとのこと。

「毎年開催されているものですが、そこには何百人と参加されています。阿曇一族の研究

をされている方は日本中に多くいらっしゃいますから。大川にも是非いらして欲しいですね」

平成三十一年より改修予定の風浪宮。天皇陛下の御代替わりもその頃に行われるだろうとのこと、その頃に記念事業を始めることができればともお話されました。

「文化庁の予算がついて、すでに日程も決まっています。高良大社の保存修理がこの秋頃には出来上がるので、次は風浪宮の番。ご神体を移して、御本殿をカラにして工事を始めます。これは国の事業で屋根の吹き替え、塗替えなどを行う予定です。いい節目の時になるかと期待しています。平成三十三年に御鎮座一八二〇年の大祭も行う予定です。以前に復曲した能楽の「風浪」もこの頃にまたご披露したいと考えています。シンポジウムなども含めて、いい記念事業にもなればと思います。

弥生時代からの歴史があり、海洋族の歴史を辿れば現在の家具の街・大川へ繋がっていると思います。この話を地域に、そして全国に発信していくことが出来ればいいなと考えています。今後は、大川という街はとてつごい歴史が詰まった街だともつと伝えていきたいですね」